
恋の雫

綾瀬メグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の雫

【Nコード】

N2798V

【作者名】

綾瀬メグ

【あらすじ】

「8月の天使」の続編。
あれから1ヶ月後。
中学最後の文化祭で、園子が脚本を書いた恋愛劇を上演する事になった歩美達のクラス。

卒業まであと少し。

歩美視点の、恋と友情のお話。

(前書き)

「8月の天使」の続編、歩美sideです。

設定は「8月の天使」から引き継いでおり、歩美達と志保は、新一達と同級生の中学3年生。

「コナン」はホームズ好きの彼に歩美がつけた、小学生からのニッケネームです。

この世界で一番嫌いで、一番好きで仕方なかった。

触れられる距離に居るのに、どんなに追いかけても縮まらない心の距離。

まるで高速のエスカレーターを逆走させられてるみたいだと思う。

真っ黒な雲の合間から、絶えず流れ続ける空の涙。

いつか私のこの気持ちも、流されて無くなってしまっただろうか。

晴れ渡った翌日、無かったように消えてしまっただけのように。

恋の雫

黒板の前にはクラス委員が2人。

明日の「本番」に向けて、最後の話し合いが行われていた。

中学生最後の文化祭で、私のクラスは舞台をやることに決まっている。

いつも受験勉強を頑張っている分、思い出はしっかり作ろうとゆうクラス委員の言葉に、皆が頷いたからだ。

それは一言で言うなら「どこかで聞いた事のあるような、お姫様と

王子様が主演の色んな話を「ごちゃ混ぜにしたような恋の話」。

衣装を合わせた私は、本番通りのメイクをして教室のドアの前に立っていた。

「ね、ねえ志保ちゃん？コレ、本当に似合ってるかなあ……」

着替えやメイクを手伝ってくれた志保ちゃんが、笑顔を見せる。

「ええ。とても似合ってるわよ。大丈夫。彼だつてきっと可愛いって誉めてくれるわ。」

「彼」。

私の気持ちを、志保ちゃんはいつだつて分かってくれた。彼女の笑顔を見て、私も頷く。

「…開けるわよ？」

「う、うん……」

ガラガラと音を立てて開いたドアから、沢山のクラスメイトの視線。一瞬体が強張りつつも、勇気を出して皆の前に立った。

「…ど、どう、かな？」

シンデレラをイメージした晴れ渡る空色。それにレースやフリルを沢山つけて、本当のお姫様みたいなドレスを着た私は、不安と期待で複雑な気分だった。

「歩美ちゃん、可愛い！」

誰かがそう言うと、口々に皆が似合う、綺麗だと続けて、女の子達は周りに集まってくる。

う、嬉しいけど…恥ずかしい。

女の子は皆、小さい頃に一度はお姫様に憧れると思う。

まさか15歳で叶うなんて、思ってもみなかった。

皆には気づかれない様に、目線だけ動かして「彼」を探す。

…いないみたいだ。

ほんの少しだけ落ち込んで、うつ向いた。

「やっぱりこのドレス、色もデザインも歩美ちゃんにピッタリだね

！」

「まさかこんなに上手に縫えるなんて思わなかったよ！」

友達の言葉を聞いて顔を上げると、「彼女」と目が合う。

「彼女」は、まるで天使の様に可愛く微笑んだ。

「あ…ドレス、本当にありがとう！大変だったでしょ？」

「うつん…私も作ってる間、すごく楽しかった。とっても可愛いよ、吉田さん。」

皆でデザインと生地を決め、その後の採寸や縫い付けを受け持ってくれたのが、1ヶ月前に転校してきた毛利蘭さんだった。可愛くて綺麗で、その上男女関係なく人当たりが良い彼女は、転校してまだ1ヶ月とは思えない位クラスに溶け込んでいる。

「せっかくだから毛利さんも劇に出ればいいのに…」

「わ、私は衣装係頑張るから！ありがとう。」

わたたと両手を振りながら、困った様な笑顔。

そんな仕草は、女の子の私から見ても素直に可愛いとってしまう。

「じゃあ最初から通してやってみよっか！皆、準備して！」

監督兼脚本家の園子ちゃんが元気な合図を送った。

この劇は、園子ちゃん自慢の自作「ロミオとジュリエットを凌ぐ超ラブロマンス」らしい。

と言うからには、もちろんお姫様と王子様が登場する。

今回お姫様選ばれたのは、なんと私。

主役なんて出来るか不安だったけど、王子様の配役を見て、引き受ける事に決めた。

「新一君は今日もお休み？…しょうがないわね。監督自らリハーサルに付き合ってくださいか。」

…そう。

「とりあえず私が王子役やるから、始めましょ！」

王子様役は、「彼」なのだ。

だけど実は、彼はまだその事を知らない。

王子様役で候補を募った時、男の子達は全員が嫌がっていた。皆の前でキザなセリフを言うのが恥ずかしい、とか。

キラキラした衣装だったら着たくない、とか。15歳とゆう年頃を考えると、それも少しは分かる気がする。

そこで、最近ずっと欠席だった彼は勝手に王子役に任命された。

ろくに練習しない人が主役なんて大丈夫？という皆の不安に園子ちゃんやんは「王子様はセリフも少ないし、お姫様がメインだから別に大丈夫じゃない？」と言っていた。

だけどもさか、本番前日も練習無しなんて…

それでも私は、例え「劇」の中だけでも彼と結ばれるのが嬉しかった。

きつと、現実では永遠に結ばれないから。

本番前日のリハーサルも終わり、窓の外はすっかり日が傾いている。これから「前夜祭」が始まる。

一般のお客さんが入れる明日と違って、学校の内輪だけで行われる文化祭前日。

さすがに受験を控えた3年生は、参加せずに帰宅する人が多かった。

私は志保ちゃんと屋台を回ったり、イベントを楽しんだり。

”今日は少し遅くなる”と家に連絡を入れて、中学最後のお祭りを隅々まで楽しみたくて必死になっていた。

ただどふとした瞬間に、心に空いた穴に気づいてしまう。

もちろん、しばらく欠席が続いて会えない「彼」の事もある。

…だけど。

あと少ししたら今当たり前に隣で笑っている志保ちゃんと、今までみたいに会えなくなるんだと考えてしまう。それがとても悲しかった。

「少し、休みましょうか。」

「…うん。」

私たちは、校庭が見渡せる校舎脇の階段に並んで座った。

お互いしばらく黙っていて、私は気づかれない様に志保ちゃんの様子を見てみる。

志保ちゃんは、膝の上に乗せた両手で頬杖を着きながら、屋台やキヤンプファイヤーで賑わう校庭を見つめて微笑んでいた。

…最初に会った時、なかなか笑ってくれなかったよね。

志保ちゃんは大人っぽくて、クールで。友達になれるか、不安だったんだよ。

だけど沢山の毎日と一緒に過ごして途中で、分かったの。この子は大人っぽいんじゃなく、クールなんかでもなく、ただ、怖くて寂しいんだって。

両親が元気で、友達にも恵まれていた私。

志保ちゃんはまだ小さい頃に両親もお姉ちゃんも亡くして、たった一人で知らないところに来たんだもん。

私の「楽しい」を、分けてあげたい。

すぐには無理でも、いつか一緒に大声で笑い合える様に。

気づいたら、今では当たり前のように隣に居てくれる親友。

親友なんて言葉で足りるかな。

私にとって、とっても大切な存在なんだよ？

”…寂しいよ。”

思わず言葉になりそうで、慌てて飲み込んだ。言ったらきつと泣いてしまう。楽しいのが台無しだ。

「…吉田さん。」

「ん？なあに？」

視線は校庭に向けたまま、志保ちゃんは続ける。

「大丈夫？明日の本番。」

「うーん…緊張するけど、頑張るよ。せっかく主役に選んでもらったし。」

一瞬の沈黙。

もしかしたら、志保ちゃんは気づいてるのかも知れない。

「そんなに…貴方が苦しむ必要はないんじゃない？」

…あ。

「明日の劇が終わったなら、工藤君を諦めようとか…そんな事考えてるんでしよう?」

…やっぱり。

「あ、あはは…さすが、志保ちゃんだね。」

心を見透かされて、泣きたい感情が喉元まで込み上げてくる。やっぱり、隠し事は出来ないね。ずっと一緒に居たんだもん。

「告白、しないの?」

「…した事もあるよ。中学生になるまでは、何度も。」

「どうして、今の気持ちは伝えないの?」

「だって振られるの分かり切ってるし…」

やばい。

泣きそうだ。

「そうやって、一人で我慢し続けるの?」

志保ちゃんが、真っ直ぐに私を見つめた。

「泣きなさいよ。」

「貴方が考えてる事なんて、こっちは全部分かってるんだから！ど
うして私の前でまで我慢するの？”友達”の前で我慢しなくていい、
ありのままでもいいって私に教えてくれたのは…貴方じゃない！」

志保ちゃんは、今にも泣き出しそうなくらい悲しい目をしている。
…そっか、そうだよな。

言葉が出ないまま、暖かいものが頬を伝う。

それは、しばらく止まりそうになかった。

それから私は志保ちゃんに抱きついて、わんわん泣いた。
辺りは賑やかで、誰も私に気づかない。

この世でたった一人、志保ちゃんを除いて。

本当は、何度も告白しようとしたの。

今の気持ちを、ちゃんと。

だけど、困った顔をするから。

”今まで通りの関係で居たい”って、聞こえる気がするから。

だけど、ずっと想い続けてたらいつかは叶うんじゃないかってどうしても期待してしまう。

いつだって、優しかったから。

だけど、分かっちゃったんだ。

あの子が現れてから。

彼があの子を想う気持ちは、私が彼を想う気持ちと同じ。

だから、いい加減諦めようって思った。

明日の劇で、作り話の中だけでも彼と結ばれたら、胸にしまって諦めようって。

なのに。

こんなに苦しいなんて。

「ほんと、馬鹿なんだから…」

私を抱き締める志保ちゃんの声が、かすかに震えた。

朝、目が覚めると。

シトシトと優しい音が聞こえた。

窓の外は雨。

今日は最後の文化祭なのに。

主役のお姫様は、真っ赤に目を腫らしていた。

「劇の本番は14時からだから、遅れないでね！それまでは自由行動ってことで！」

衣装や立ち位置など最後のチェックを終えて、志保ちゃんに声をかける。

「私、まだやる事が残ってて…：終わり次第行くわね。」

舞台係である志保ちゃんは、まだ忙しそうで一緒に回れそうにない。

一人で回るのも暇だし、誰かを誘おうと思った時。

目に入ったのは「彼女」だった。

考えるより先に、私は彼女に声をかけていた。

「毛利さん…良かったら、一緒に見て回らない？」

突然話しかけられて少し驚いた顔をした彼女は、しばらく不思議そうに私を見つめた。

そりゃそうだと思う。

それは今まで私が彼女を何となく避けていたせいで、まともな会話をした事が少なかったからだ。

それでも彼女は笑顔で答える。

「いいよ。お腹すいたし、何か食べに行こっか？」

「うん！雨だから屋台はやってないだろうし…校舎の中で探そうよ。」

二人で歩き始めた時、志保ちゃんと目があつた。

志保ちゃんは少し呆れた様な笑顔をしたけど、手を振って見送ってくれた。

二人で並んで廊下を歩く。

初めての事だけど、彼女はとても話しやすく、気まずい沈黙や雰囲気は一切ない。

綺麗な黒髪のロングヘア。

色白で細い体。

天使の様な笑顔。

嫉妬を通り越して見とれてしまいそうになる。

彼も、こんな風に想うのかな。

1年生が開いていた”喫茶店”に入って、向かい合って座る。手作りが漂う、いかにも「中学生の文化祭」という雰囲気のカフェだ。ただ、一生懸命に飾りつけされた教室を見て、”可愛いね”と彼女は微笑む。

私は、彼女と仲良くなって、良いところを沢山知って、自分に思い知らせてやりたかった。

”この子には敵わないんだから、諦める”って。

「毛利さんは、どうしてこの時期に転校を決めたの？」

「…。」

初めて、彼女が言いにくそうに言葉に詰まった。何か、聞いちゃいけない事だったのかな？

しばらくして、彼女が口を開いた。

「私の両親…別居しててね。10年間、私はお父さんと離れて暮らしてたの。だけど先月、また一緒に暮らせる事になったから。」

それは、予想してなかった答えだった。何の気なしに聞いた質問で、嫌な事を思い出させてしまったかもしれない。

「あ…ご、ごめんね！」

「ううん、いいの。本当の事だし、隠す事じゃないから。それに今は家族一緒なんだもの。」

「吉田さんは優しいね」とクスクス笑う。自分が空回りしているような気がして、私は顔が赤くなってしまふ。

その後も「クラスには慣れた?」「得意科目は?」「どこに住んでるの?」と質問攻めにしても、毛利さんは一つ一つ丁寧に答えてゆく。

でも、何となく踏み込めない。
まだ彼女との間には壁がある。

「ねえ…」

「ん?」

彼女は”次は何?”とニコニコしている。

「好きな人居る？」

「…へ？」

数秒キョトンとして、私を眺める。おまけ口が少し開きっぱなしで、それがまた悔しいくらいに可愛らしい。

「…」

「歩美ちゃん！」

毛利さんが何か言いかけた時、その声が遮った。

入り口に立っていたのは、光彦君だった。

その後ろに、元太君と志保ちゃん。

そして、コナン君の姿。

「歩美ちゃん、毛利さんも！良かったら、これから皆でお化け屋敷に行きませんか？」

「まったく…貴方の考える事って…」

呆れた目で見てくる志保ちゃんの視線が痛い。

志保ちゃんの言いたい事も分かる。

恋敵ライバルの良い所を知って自分の想いを諦めさせる、なんて荒療治に手を出そうとしたんだから。

前を歩く4人から一步離れて、私達の内緒話は続く。

「お化け屋敷、工藤君と一緒に入ったら？私が何とか上手くやるから。」

「え…。」

「二人きりになれる事なんて、あんまりないでしょ？いつもオマケが付いて来るんだから…」

ジト目で元太君と光彦君を睨む志保ちゃん。

お、オマケって…

志保ちゃんの気持ちは、素直に嬉しい。

私もコナン君と入りたいもん。

だけど、コナン君は毛利さんの方が良いに決まってる…

「あ、あれですね！」

「なんか異様に本格的だな…」

「早く入ろうぜ！」

スタスタ向かっていく男子達と対照的に、毛利さんが立ち止まった。

「よ、吉田さん…ゴメン、私やつぱり…」

顔色が真っ青になっている彼女を見れば、相当お化けが苦手なんだろう…とすぐに誰もが分かる。

「ダメよ…毛利さん。2人1組で入るんだから。」

志保ちゃんが言い放つ。

「どうやらさっきの”作戦”はもう始まっているらしい。」

「そ、そんなあ…」

涙目で悲願する毛利さんを見ると、さすがにちょっと可哀想な気がする。

「じゃ、どの組から入ります?」

受け付けの前で、皆が輪になる。

元太君が”何でもいいから早く入ろうぜ”と光彦くんを急かし、光彦君は志保ちゃんをチラチラ見てる。志保ちゃんコナン君の様子を観察する様に見ている、そのコナン君はやっぱり毛利さんを少し心

配そつに見てて、毛利さんは「どうしても入らなきゃダメ？」という目で私を見ていた。

「とりあえず私が毛利さんを連れてくから、貴方はしっかり工藤君を誘いなさいよ。」

志保ちゃんが私に耳打ちをする。

「じゃあ私、毛利さんと…」

言いかけた志保ちゃんを、光彦君が急に遮った。

「み、宮野さん！一緒に入りませんか?!」

「え?!」

「じゃあとりあえず、お前ら先行けよ!」

「ちよ、ちよつと…!!」

元太君は、志保ちゃんと光彦くんの背中を無理矢理受け付けに押し込んだ。

2人が真つ暗なカーテンの中に消える直前、志保ちゃんと目が合う。きつと”彼を誘え”とゆづ合図。

コナン君を見る。

彼は私の視線に気づいて、困った様に微笑んだ。

そう、この笑顔。

私の気持ちを何もかも知ってて、それでも優しい彼の笑顔。

きっと私が誘えば、コナン君は「いいよ」と答えてくれる。

本当は、毛利さんと一緒に良くても、それを私の前では絶対に口にしない。

その優しさが、世界で一番嫌い。

だけど今まで私は、この優しさに甘えて利用してきた。

いつか振り向いてもらえるなんて、淡い期待を抱いて。

「…コナン君、」

キュッと胸が締め付けられた。

…やっぱり、言えない。

「私、毛利さんと一緒に入っている？女の子同士、遠慮なく騒げて楽しそうだし！」

私は半ば強引に、毛利さんの腕をとって引き寄せる。彼女はよっぽど怖いのか、まだ小さく震えていた。

「…毛利さんは、いい？」

もちろんいいよ、という彼女の笑顔を見て、自分がどんなに汚れた心を持っているか思い知る。

私はただ、コナン君を誘う勇気がなかっただけで。

「だけど彼に」彼女と一緒に入りなよ」と言えるほど、二人が並んで歩く姿を平然と見られるほど、強くなかったただけなのに。

それ以上は考えたくなくて、ブンブンと頭を振って切り替える。

「行こう！」

「う、うん。頑張ろうね。」

中に入ると、ヒンヤリした風が背中に当たる。

真っ暗な空間に光るブラックライト、気味の悪い音楽…

そこらじゅうから幽霊（仕掛人）が飛び出し続けて、毛利さんはすでにぐるぐる目を回している。

私も予想外の本格さに、出口まで辿り着けるか不安になってきた。

「も、毛利さん大丈夫？」

「う、うん…あんまり…」

「じゃあさ、手つないで進もうよ！」

「あ、ありがとう！」

そう言っつて毛利さんの手をとると、違和感を感じる。

華奢な指に、沢山の絆創膏と包帯を巻いてるみたいだった。

……あ。

気づいてしまった。

彼女は、本当に一生懸命、私のドレスを作ってくれたんだ。

いくら裁縫が得意だからって、あれだけ上手に作るには、物凄く大変だったと思う。

こんなに怪我をして、きつと沢山自分の時間を割いて……

私と対照的な、その優しい心の持ち主の手を強く握る。

今度は精一杯、純粋な気持ちで。心からの感謝を込めて。

私達は一緒になって、声が枯れそうな位、きゃー！とかわあー！とか、沢山悲鳴をあげた。

二人でフラフラになりながら、支え合って歩いた。

なんだか、あまりに情けなくて笑ってしまう。

「はは…なんか…おかしいよね、私達。」

「うん…情けないよね…」

驚いたり泣いたりでボロボロになってるのが妙に情けなくておかしくて、しばらくお腹をかかえて笑い合った。

私は、少しづつ覚悟する。

シンデレラが普通の女の子に戻ってしまう、カウントダウンを。

「はあ！？王子様だあ！？」

「休んでるのがワリーんだぞ？」

「男子代表なんですから…頑張ってくださいよ！」

「そんな事言われても…」

「歩美のドレス姿、すげー可愛いんだぞ！」

「羨ましい位ですよ！」

「じゃーオメーらがやれよ！」

私達6人は、渡り廊下から校庭を見下ろしていた。
相変わらず空は雨模様で、校庭にはカラフルな傘が点々と散らばっている。

だけど皆が揃えば、雨の日だって気分が落ち込まないから不思議。
そんな事を考える。

志保ちゃんはというと、何だか機嫌が悪そうだった。

理由はきつと、さっきの事だけど…今はそつとしよう…

「さすがに少しは打ち合わせしないとマズいんじゃないですか？
— 応主演ですし…」

「主役が恥かいても知らねえぞ？」

「誰のせいだよ！…たく…とにかく園子に話つけねーとだな…オレ、
ちよつと体育館行ってくる。」

コナン君の後ろ姿が遠ざかるのを眺めていたら、志保ちゃんが不機嫌な顔のまま呟いた。

「貴方もそろそろ行ったら？主役なんだし。」

…ありがとね、志保ちゃん。

私は皆に後でね、と別れを告げて、先に行くコナン君の背中を追いかける。

きつと、これが最後のチャンス。

どうしても、言わなくちゃいけない事があるから。

「待って、コナン君！」

「…歩美ちゃん？」

振り向いた彼は立ち止まって、私が追い付くまで待っていてくれた。

「わ、私もそろそろ準備しに行こうと思って…一緒に行く？」

「そっか、歩美ちゃん、お姫様役なんだもんな。」

久しぶりに、コナン君と二人きりで並んで歩く。

隣で歩く彼の横顔を見て、浮かんでくる小さい頃の記憶。

いつの間にこんなに背が伸びたんだろう。

昔は、私よりも少し小さいか同じ位だったのに。

声は低くなって、大人っぽくなった。

相変わらず頭が良くて、サッカーが上手で。

キザでクールでカッコ良くて、それなのに照れ屋さんで可愛くて。

こんなに諦め切れなくて、しつこくて重い恋にさえ優しくて。

ずっとずっと、想い続けてごめんね。困らせてごめんね。

でも、もう最後だから。

「…歩美、ちゃん？」

立ち止まる私に、問いかける声。私は彼の顔を見るのが怖くて、下を向いたまま。

「コナン君は、好きな人いる…？」

答えなんか聞かなくなつて、本当は知ってる。意地悪な質問だつて、自分でも分かつてる。

「…うん。いるよ。」

彼は嘘をつかなかつた。

答えは分かつてたくせに、胸がギュッと締め付けられる。

「そっか…私も、いるよ。好きな人。コナン君はずっと一緒に居たから、知ってるかな…？」

「…うん。」

足元に、涙の雫が溢れ落ちる。

私の恋が、みるみる水滴になって流れ出す。

いくら募らせたって、叶わないまま消えてしまうのに。

「…好き、…だよ。」

「……………ありがとう。」

彼がどんな顔でそう言ったのかは、分からない。

だけど声はとても優しく、余計に涙が止まらなかった。

昨日あんなに泣いたのに、止まることなく流れ落ちる。

それから、体育館に着くまでの間、コナン君は何も言わなかった。私もそれ以上何も伝えなかった。

ただ、無言で揃えてくれた歩幅に、また彼の優しさを感じた。

2日連続で泣き腫らした目をメイクで隠して、空色のドレスを着る。合流した志保ちゃんや毛利さんも手伝ってくれて、私は本物のお姫様みたいに華やかになる。

本番まで、あと30分。

私の心はもう、決まっている。

コナン君は結局王子様役を断り切れずに、セリフを大幅に削った台本で演じる事になった。

「じゃあ、お姫様と王子様のご対面といきますか!」

園子ちゃんがコナン君の腕を引っ張って、私の前に連れてきた。コナン君の衣装は王子様というより騎士のイメージらしくて、悔しいけどカッコいい…

「ホラ、新一くん!歩美ちゃん、本当のお姫様みたいでしょ?!」
そういえば、彼にこの姿を見せるのは初めてだった。

昨日は恥ずかしいけど見て欲しくて、似合ってるか不安で、あんなにソワソワしてたのに。

何だか色々あり過ぎて、思わず忘れていた。

さっきの出来事を皆に気づかれたくなくて、必死でいつもの様に振る舞う。

「ど、どうかな？似合ってる？ことドレスね、皆が考えて、作ってくれたのは毛利さんでね…」

「…すげー似合ってるよ。」

…へ???

「可愛いよ。」

コナン君は、少し顔を赤くしながら微笑んでそう言った。

…じわり。

また、涙が滲んで来てしまう。でも、今私ができる最高の笑顔で答

えた。

「…ありがとう！」

お姫様になれた私が、彼から一番聞きたかった言葉。それだけで、もう充分。

私は今までにも、沢山の幸せな気持ちを彼から貰ってきたんだから。

ちよつと忘れ物、なんて言っつて皆の輪から少し外れる。

足元にある工具箱に目を向け、ドレスに合わせたパンプスを片方脱ぎ捨てる。

…もう時間だよ、シンデレラ。
夢から覚めなくちゃ。

目を瞑り、思いつきり。

ガツシャーーン！！！！

「な、何の音?!」

「歩美ちゃん?!」

突然聞こえた物凄い音に、皆が集まってくる。

「いったあゝ…」

「捻挫してるじゃない!真っ赤に腫れてるわよ?!」

駆け寄ってきた志保ちゃんが、私の右足を見る。

工具箱を素足で思いつ切り蹴りあげたせいで、自分でも驚く位に腫れ上がっていた。

「ちょ、ちょっとつまづいちゃって…た、立てないかも。」

「大丈夫?保健室行かなきゃ…」

「でも、舞台は?」

「主役が居ないと…」

まさか中止?

監督である園子ちゃんを中心に、皆が不安を口にする。

「ほ、本当にゴメンね！でも園子ちゃん、私に考えがあるんだけど……」

「え？」

「私の代役！毛利さんをお願い出来ないかな……？」

私の言葉に、皆が同時に毛利さんを見る。

志保ちゃんだけは、私を見つめていた。

「え……？わ、わたし……？」

「毛利さん、お願い！監督以外で上演中に役がない人、あんまり居ないし……」

「……そうね。裏方も人手がギリギリだし、衣装係の貴方が適任じゃないかしら？」

……志保ちゃん。

「そうねえ……外見はお姫様として全く問題ないし、セリフも私達と一緒に練習を何度も見てきているから……いけるわよね？」

皆が顔を見合わせ、頷く。

「毛利さんに決定！」

「えええ?!」

園子ちゃんに無理矢理肩を押され、連れて行かれる毛利さんと目が合う。

「大丈夫。毛利さんなら、必ず王子様と幸せになる素敵なお姫様になれるから。」

「よ、吉田さん…?」

そんな言葉が出たのが、自分でも不思議だったが、でも何故だか素直にそう思えたから。

「さてと?」

一人残った志保ちゃんが、肩を組んで立たせてくれる。

「まずはそのドレスを脱いで、さっさと足の治療をするわよ。0時を過ぎたシンデレラさん。」

「あはは…やっぱバレてた？」

当たり前でしょ、と志保ちゃんは呆れた様に微笑んだ。

保健室に連れて来て貰って、右足を包帯でぐるぐる巻きにした。

体育館では、もう舞台が始まっている。

もう一人で大丈夫だから、と志保ちゃんにも戻ってもらった。

片足でピョンピョン飛び跳ねながら保健室を抜け出し、こっそり体育館を覗く。

空色のドレスを着た毛利さんは、凄く緊張している様に見えたけど、とても綺麗だった。

「彼」と「彼女」。

見とれちゃうくらいに、二人はお似合いの王子様とお姫様。

彼女が転校して来た時、本当はとても怖かった。

私は彼をずっと見てきたから、すぐに分かっちゃった。

彼女と居るときは、他の誰にも向けたことの無いような笑顔を見せるんだもん。

永遠に私が見ることのないその笑顔さえ、好きで仕方なくて。

でも、きっと諦めなきやいけない日が近づいてるって怖くて。

辛い事すら笑顔に変えて、誰かに優しく出来る人。

誰にも言わずに、たった一人で誰かの為に頑張れる人。

おまけに可愛くて綺麗で…女の子の私だって納得しちゃうよ、あなたの気持ち。

…ほんの少し、悔しいけど。

沢山の彼との思い出が、胸を駆け巡る。

ほんとに長かった。

ずっと彼だけ見てきた。

最後に、私の気持ちを聞いてくれてありがとう。

可愛いって言うてくれて、ありがとう。

大好きだったよ。

空を見上げると、黒い雲の切れ間から太陽が見えた。
長かった雨は、もうじき止む。

明日になったら太陽に照らされ、地面は乾き、雨は最初から無かった様に消えてしまう。

きっと、私の恋も。

一筋の恋の雫が、頬を伝う。

「…あ。」

太陽が世界を黒から白へ。
空には、大きな虹がかかる。

…そっか。

雫はただ消えてしまっくんじゃなくて、七色の虹に生まれ変わるんだ。
そしていつか形は無くなってしまっても、こっうして心の中で記憶おぼえてとして残る。

いつか新しい恋をしたとしても、きっと永遠に。

「…きれい。」

私は思いっきり背伸びをして、輝く虹に手を伸ばした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2798v/>

恋の雫

2011年10月9日11時46分発行